

佐倉久隆君を悼む

7組 山本 哲照

2024年5月12日(日)に小田原駅西口の割烹「とろせい」で小田高11期生クラス幹事の懇親会兼情報交換会が開かれた。4年ぶりの集いで旧友との再会を楽しみにしていた。いつも来ている1組幹事の佐倉久隆君の顔が見えないので変だなと思っていたが、会合の冒頭同じ1組の塩海君が「佐倉君が急逝して昨夜お通夜だった」と告げた。思いもかけない報告に大きな衝撃を受けた。会合の間、彼との思い出が走馬灯のように頭の中を駆け巡り、その会合でどんなことを話し合ったのかほとんど覚えていない。

佐倉君の生家は旧住居表示で「小田原市万年3丁目553番地」私の生家は「小田原市万年4丁目556番地」。数値では距離感が湧かないが実際は直線距離で百メートルも離れていなかった。ただし、この距離の間に学区の境があり、彼は本町小学校、私は城内小学校に進学し、幼いころには全く接点はなかった。城山中学校、小田原高校でもほとんど交流はなかったが、大学進学時にはお互いに一浪して中央大学に進学、現役学生の親睦団体「中央大学小田原白門会」に入会して知り合ってからはずいぶん親しく交流するようになった。なにしろ住む家がすぐ近くにあり、夜中に家人が寝静まったころお互いの家を訪問して、夜明けまで語り明かしたものだ。

彼の母親は城内高校で音楽の教師だったが。その血筋なのか彼も音楽が好きでいろいろな楽器を扱うことができ、特に中大では「ルナ・タンゴ・アンサンブル」と言う楽団に所属し、ベースギターを演奏していた。小田高ではないが本町小の同期生尾崎(後に割烹小伊勢屋主人・故人)小田高同期の石黒忠正(故人)、和田守弘君などとも親しいグループを作っていた。このグループは私とは毛色の異なる芸術家タイプなので私はメンバーではなかったが・・彼は「久隆」と言う名前から親しい友からは「チャコ」と呼ばれていた。性格は温和で物言いも穏やかで気遣いのできる人柄だった。彼が声を荒らげたり人と争っている姿を見たことがない。

小田原白門会は小田原市近郊でよくアルバイトを会員に斡旋してくれて、私も佐倉君もよく同じところでアルバイトをした。今でも強く記憶に残っているのは当時小田原駅前にあった「箱根登山デパート」で販売や配送の仕事をしたこと、箱根山中で藪をかき分け蜂に刺されながら測量の手伝いをしたことなど。

彼は中大を卒業して最初に入社したのは東京・日本橋にあった「岡三証券」。その後当時小田原市鴨宮にあった「園池製作所」に入社してそこで働いていた。先日会合で彼の訃報を伝えてくれた塩海洋介君が園池製作所への転職に尽力されたということを知った。私はこのことを知らなかったように大学卒業後は進路が全く分かれてしまい、さらに彼の結婚が早く生活環境が離れてしまったせいもあり、学生時代のように頻りに顔を合わせることはできなくなってしまった。ただ、サラリーマン生活に見切りをつけ、調理師の資格を取り、小田原市井細田の「味のプラザ」ビルに飲食店を開業したことはよく覚えている。年齢は37、8歳の頃だった。この店には私も数回通った。料理の腕はよく客の評判も上々だったが、長くは続かなかった。店を手伝うはずだった奥さんが妊娠・出産することになり、続けられなくなったというおめでたい理由で・・

この後彼とはほとんど顔を合わせる機会が無くなり、たまに街角や駅構内などで邂逅すると長い立ち話をする程度の付き合いになってしまった。しかし、2017年から彼が「小田高11期生1組幹事」として活躍することになり、昔の付き合いが戻りつつあった。幹事会で顔を合わせるたびに隣の席に座り、よもやま話をするのが常だった。コロナ禍も下火になり会議の席以外でも会おうと約束していたのにこんなに早く急いで逝ってしまうとは思ってもいなかった。彼のことを考えている時突然一つのことを思い出した。今までの私の日常生活の中では一度も思い出したことの無いことだった。それは二人の誕生日が1日違っていたことだ。

佐倉久隆 昭和15年12月11日生まれ

山本哲照 昭和15年12月12日生まれ

学生時代の深夜、お互いの家で語り合った時にこのことが分かり、びっくりしたものだ。こんな近い場所で1日違いでこの世に生を享けたのだと・・・

今では幽明境を異にしてしまったが、佐倉久隆君、長い間の友情をありがとう。奥さんとも先日久しぶりに会話ができました。お元気そうでしたよ。私もそちらへ行くのはそんなに遠い未来ではないでしょう。ではまたあの世で会いましょう。どうか安らかにお休みください。合掌 山本 哲照